

# 大学講義に使用される動詞 有標表現と補助動詞を中心として

十島真理

キーワード：大学講義 動詞 有標表現 補助動詞 聴解

## 1. 目的と問題の所在

近年、大学に在籍する外国人留学生が専門教育を受けるために必要とする日本語教育に関する基礎研究が盛んになっている。大学講義の聴解は、外国人留学生にとって最も重要な技能のひとつである（仁科他 1991 他）が、講義聴解には様々な要因が複雑に絡んでくるため、なかなか指導までたどりつかないのが現状である。

講義分析に関する先行研究には、理科系講義と文科系講義の特徴の差を分析したもの（石田 1992、金久保他 1993、十島他 1994 他）、語彙レベルの分析を行ったもの（東大工学部チーム 1989、早川他 1992 他）、談話レベルで分析を行ったもの（伊藤 1990、鎌田他 1993 他）等がある。また最近では、講義聴解のための教科書も数冊出ている（深尾 1993 他）が、大学講義の構造や使用される語彙・表現等は明確にされておらず、基礎的な研究はまだ不十分である。本研究では、基礎的研究の第一段階として動詞の語彙分析を行う。理工系の講義に使用される動詞の語彙を調べた先行研究はいくつかあるが、詳細な分析やその使用環境を分析したものはない。発話理解の重要な位置を占めると考えられる動詞の使用語彙と使用環境を明らかにし、講義で使用されやすい機能や日本語教育で扱っている語彙、機能との重複を考察することで、講義聴解指導にむけてのひとつの手がかりとしたい。

## 2. 分析の対象と分析方法

### 2.1 分析対象

筑波大学構造工学分野の 6 講義、各 75 分を文字化した資料を対象とした。講義の対象は学類の 3、4 年生で、講師は全員異なる。開設科目名は以下の通りである。

材料力学 材料学 コンクリート工学 応用数学 I 耐震工学 流体力学

### 2.2 分析方法

1994 年 6 月に録画録音した講義の文字化を行い、分析を行った。分析項目は以下の通りである。

- ① 数量的な観察：講義全体に関するのべ語数、異なり語数を調べる
- ② 他の語彙調査との比較：語彙の難易レベルを調べるために以下の 5 つの語彙調査を比較対象とした。

- ・『日本語能力試験 1 級出題語彙』（国際交流基金 1994）
- ・『日本語能力試験 2 級出題語彙』（国際交流基金 1994）
- ・『日本語教育のための基礎語彙調査』（国研 1987）
  - a) 2000 語（初級修了レベル）
  - b) 6000 語（中級前半修了レベル）
- ・『日本人の知識階層における話しことばの実態』（国研 1980）

③有標表現：

講義の聴解を難しくしていると考えられるもののひとつに、ある特定の機能を担う動詞の存在がある。発話には、ただ客観的事象をそのまま陳述しているものと、発話者の判断をはじめとした何らかの主観的な発話態度を反映したのものがある。後者は客観的事象に対する発話者の評価等が含まれているため、講義を正しく理解するのに重要な位置を占める。また、動詞が言及している主体は何かを判断するために、受け身や使役といったヴォイスの正確な聴取も不可欠である。

このような動詞を中心とした用言の特定の機能に注目した先行研究には、山本(1985)、金(「石田」1991)がある。山本(1985)は、一般教養専門書の分析において、文法上の難易度が高く、そのため読解を難しくさせる要因であるとともに、筆者の判断、意見、見解、推測といった意図、論理の展開に関係するものとして、次の7項目をあげて、marked文とし、考察している。

- ・受け身、可能、打ち消し、推量、意向、使役、double

ただし「double」は、他の6つの項目から2つ以上の項目が一緒になったものである。分析の結果、marked文の各分野での平均出現率は、「物理・数学」で10%、「生物・心理学・情報科学・経済学・生理学」で29%、「哲学・社会学」で41%となり、分野ごとに差があることが分かった。また、marked文の出現比率と平均文長とに相関が見られたことから、「文の長さが文構成の複雑さを示すひとつの要素であると同様、marked文の増減も読みの難易に関わる要素をしめる指標となりうる」としている。

金(「石田」1991)は、構造工学系の講義の分析にあたり、「有標発話」として、以下の項目を立てている。

- 1) 発話の種類：疑問、感嘆、否定
- 2) 時制：現在進行、過去、過去進行、推測、意志、
- 3) その他：受け身、使役、可能
- 4) 倒置：倒置

金は、発話の終わりにある用言をその他の用言と区別して、「発話末の用言」と「発話内の用言」として分析をした。その結果、「有標発話」の総用言に対する比率は、「発話末の用言」で38.09%、「発話内の用言」で30.97%と、かなり高い数値を得ている。

本研究では、これらのある特定の機能を有する動詞を有標表現とよぶ。山本

(1985) および金(「石田」1991)が述べるように、有標表現は講義聴解の難易に大きく関わっていると考えられる。これは講義における有標表現の研究の必要性を示している。本研究での有標表現の項目は次の通りとする。

- 1) 受け身、可能、使役 : ヴォイス
- 2) 意志・勧誘、命令、比況、願望、説明 : ムード

④その他：否定、補助動詞のついたもの、敬語、double

その他の項目では、ひとつの目安として、講義に使用される動詞で、否定形の占める割合をみる。

また、講義でよく使用される言語形式に、「動詞のte形+補助動詞」がある。「動詞のte形+補助動詞」は、日本語学習者にとって、習得困難なもののひとつである。多用される補助動詞の使用環境と使用状況、また実質的に機能しているものの程度等の情報は、講義聴解に留学生が強いられているストレスの軽減につながるものと思われる。その他、講義に現れる待遇表現に関して、ここでは狭義の敬語の観点から講義の丁寧さのレベルをみる。

### 3. 分析の結果

#### 3.1 講義における動詞・助動詞の使用状況

講義に使用される動詞、助動詞の使用状況を以下の表1に示す。表内の比率は、講義に使用された名詞、動詞・助動詞、形容詞、副詞、接続詞ののべ語数、および異なり語数の総計に対する比率である。なお、助詞を含むと数値が煩雑になりすぎるため、今回は助詞は分析の対象とはしなかった。

表1. 動詞・助動詞の使用状況

	のべ語数	比率	異なり語数	比率
動詞・助動詞	6455	23.7%	357	12.8%

講義に使用された動詞を他の「語彙調査」と比較した結果を表2に示す。「一級」つまり大学入学資格レベルの留学生で講義に使用される語彙の80%を、「六千」つまり日本語教育中級前半終了レベルでも75%を理解できるといえる。

表2. 「語彙」比較

	「一級」	「二級」	「六千」	「二千」	「知識階層」
重複語数	283	249	268	197	75
重複比率	79.3	69.8	75.0	52.5	21.0

分析項目の総数は付表1の通りである。補助動詞に関しては、詳細を付表2に別記する。以下各項目について詳細に検討していく。

## 3.2 ヴォイス

### ①受け身

出現比率は 1.6% と高くはなかった。金 (石田 1991) の結果では「発話末」で 0.97%、「発話内」で 0.44% とさらに低くなっている。これらに比べて、テキストの分析 (山本 1989) では「物理学・数学」での平均出現比率が 4% となっており、書きことばの方が比率が高いことが分かる。

受け身の形で用いられる動詞の種類は偏っている。中でも「する、使う、与える、いう、呼ぶ」の 5 つの動詞で半数以上の 60.6% を占めている。頻度数 2 以上のものは以下の 11 の動詞で、各性質から次の 3 項目に下位分類できる。

- 1) 作業に関するもの：曲げる、加える、する、行う
- 2) 定義に関するもの：導く、いう、呼ぶ、与える、考える
- 3) 表示に関するもの：表す、示す

いずれも難易レベルのあまり高くない動詞である。また、2) および 3) の項目は受け身の形をとりある程度固定された表現であるので、このまま覚える必要がある。

### ②可能

本研究では可能表現として、以下の 3 項目をとる。

- 1) 可能の意味を示す接辞 '(rar)eru' がついて状態動詞になったもの
- 2) 形式名詞 'こと' に可能動詞の 'できる' がついた慣用句により可能の意味を示すもの
- 3) 接尾辞 '得る'、また意志動詞に補助動詞 'きれる' がついて可能の意味を示すもの (益岡 1992)

分析の結果、出現比率は 3.1% であった。金 ('石田' 1991) と山本 (1989) の結果と比較すると次のようになる。

- ・構造工学系講義：「発話末」 0.91%、「発話内」 0.88%
- ・「物理・数学」専門書：「数学」テキストのみ 2%

この場合、金と山本の「可能表現」の定義が明確にされていないため、正確な比較はできないが、話しことばと書きことばの比較ではなく工学系の日本語として見た場合、おおよそ可能表現の出現率は全体の 2% 前後だということが窺える。

講義の可能表現は、2) 「～ことができる」という慣用句を用いた表現が、可能表現全体の 58% を占めている。これは動詞の辞書形に接続するので、日本語教育でも比較的早期に導入することのできる簡単な可能表現である。

ついで「1) 接辞 '(rar)eru' のついたもの」が 40% を占めている。この「1) 接辞 '(rar)eru' のついたもの」でも、使用される動詞には偏りがあり、「いえる、得る、書ける、見える、表せる」の 5 動詞のべ使用度数は、「1) 接辞」の総使用度数のうちの 58.4% にのぼっている。以下に「1) 接辞」に 2 度以上使用された動詞を分

類する。これらの動詞で「1)接辞」の総使用度数の80.5%をしめる。

- 1) 計算に使用される動詞 : 求める、入れる、入る、解く
- 2) 定義や思考に関する動詞 : 考える、導く、いう、表す
- 3) その他の動詞 : 作る、下げる

接辞 '(rar)eru' のついた可能表現は、日本語学習者にとって難解なものである。しかし、構造工学の分野に現れるものは種類と性質が非常に限定されている。前述した分類から、必要な「接辞 '(rar)eru' のついた可能表現」は、「1) 計算に使用されるもの」および「2) 定義や思考に関するもの」である。これらは固定された表現であり、専門教育に移行する以前に日本語教育の中で十分取り入れられるものである。

### ③使役

使役表現は、日本語教育の上級ではかなり重要視される項目であるが、講義にはほとんど使用されていない。金(石田 1991)でも「発話末」で0.12%出現しているのみで、山本(1989)でも0%となっている。

## 3.3 ムード

### ①意志・勧誘

「意志・勧誘(共同動作の申し出)」として取り上げたのは「行こう、食べよう、行きましょう」の形で現れているものである。山本(1989)のいう「意向」と本研究の「意志・勧誘」が対応するものかどうか定かではないが、「物理・数学」の専門書には「意向」の表現は現れてきていない。金(石田 1991)では、「発話末」で0.91%、「発話内」で0.88%の「意志」が現れている。

本研究の「意志・勧誘」も頻度比率が0.68%と低く表現の傾向しか窺えない。概観して、「ちょっと書こうか」といった聞き手(学生)に確認するタイプのもの、「やっぱ計算しよう」といった発話者(教師)の独り言タイプ、そして「じゃあ、次いきましょう」といった談話構成のための進行のマーカータイプなどが見られる。

### ②命令

「命令」とは、相手に動作を強制するときのムードであり、「強制される動作の内容」(命題内容)と強制するという話し手の意志の表明が必要とされるものである(益岡 1992)。日本語教育ではあまり取り扱われていない項目である。

本研究では「命令」を、1) 動詞の命令形(食べろ)、2) 動詞の連用形+なさい(食べなさい)、の2つの明示的な形式のみを取り上げた。

「命令」の使用頻度比率は0.29%と低いが、この表現の重要性は「解決すべき問題の提示」に関係していることにある。

殊に重要なのは、「2) 動詞の連用形+なさい」の形式である。これは通常試験等の問題文の文末にくるもので、講義の場合には引用の助詞「と」と一緒に使用される。この表現はこれから話される内容の主題を提示することが多く、聞き取りの

予測に必要なものである。「2)動詞の連用形+なさい」は、ほとんどが計算の問題を提示するもので、使用される動詞としては「計算、変換、証明、因数分解、微分」等の名詞を語幹にもつサ変動詞、求める、決める、いう、等が主なものである。

### ③比況

動詞のte形+助動詞の「ようだ、みたいだ」のついたものを「比況」として取り上げた。比況に使用される助動詞の9割は「ように」「ような」がしめている。

### ④願望

「願望」のムードには、1)「動詞のte形+たい」と2)「動詞te形+ほしい」のふたつの形式がある。1)「動詞のte形+たい」は、自分の動作・状態に関する願望を表すものであり、2)「動詞te形+ほしい」は、他人の動作・状態に関する願望を表すものである(益岡1992)。

ここで取り上げた「願望」は、1)「動詞のte形+たい」のみであり、2)「動詞te形+ほしい」の形は、補助動詞のところで別に取り扱うことにする。

「願望」の講義における使用頻度比率は0.85%と低い。しかし、「願望」の表現は単に発話者の願望を表すだけではなく、「と思う」「んですが」等の表現と共に、これから話される内容の主題を提示するという機能を持っていると考えられる。

- ・絵に描いて説明できるような概念を持ってきたいんですね。(講義6/65)\*1
- ・何を求めたいかという、(講義3/42)

また、一般日本語における「願望」の使用と違う点は、ほとんどの場合、「願望」する主体は発話者自身ではなく、講義に参加している人々、あるいはその教授項目に関係する人々すべてを括った「私たち」であるという点である。「水が飲みたい」というような単純な「願望」ではなく、「曲げを小さくしたい、ということは曲率を小さくしたい、ということはEIを大きくしたい(講義1/434,436)」のように、「～したい」ので「～する」といった「目的」意識が前面にでたものが多い。

以上のことから、「願望」のムードというより「目的表示」のムードといえる。

### ⑤説明

「説明」のムードというのは益岡(1992)によると、ある事態を別の事態の説明として述べるムードをいい、形式としては「+わけだ」「+のだ」がある。「+わけだ」が客観的な理屈に基づく説明であり、「+のだ」は発話者の主観的な判断にも用いられるという違いがある。使用頻度では「+のだ」が314回、「+わけだ」240回となっており、「+のだ」の使用が高くなっている。しかし、講義のなかで扱っている講義内容を考えると、話し手の主観的な判断で述べているとはいえない発話が多いので、「+のだ」と「+わけだ」の使い分けについては詳しく考察をする必要がある。

また、講義に使用される「説明」のムードは、総用言数に対する比率が8.5%も

あり、発話を複雑化し、長文化させる要因になっていることが窺える。

### 3.4 その他

#### ①否定

否定表現は、総用言数に対して6.71%と低いとはいえない。金（「石田」1991）の分析では、「発話末」に現れる否定表現は5.81%、「発話内」では6.35%と似たような数値になっている。。山本（1989）による「打ち消し」は、「単純な否定ではない強調のための打ち消し」と定義されているため、比較の対象にはならない。

#### ②補助動詞

講義に使用される日本語には、動詞のte形に補助動詞のついた形式のものが多くみられる。本研究で観察された「動詞のte形+補助動詞」は、のべ語数で1280語、動詞・助動詞総数6455語に対する比率は19.8%と、約20%になっている。「te形+補助動詞」は、それに関わる補助動詞の種類によって、動作や作用の進行や結果の状態、あるいは方向性のある移動や、授受関係、敬意等を示すため、日本語学習者にとっては学習困難な項目である。講義に使用された補助動詞の種類は以下のものであった。

－いる（－る）　－ある　－おく（とく、－おる、とる）　－いく（－く）  
－しまう（ちゃう）　－みる（－みせる）　－ほしい　－ください  
－くれる　－もらう　－いただく　－やる　－まいる　－おられる

補助動詞のなかで、使用頻度の高いものは「－いる」9.18%、「－くる」3.09%、「－しまう」1.35%、「－いただく」1.18%、「－ある」1.03%であった。いずれも比率は動詞・助動詞総数6455語に対する比率である。以下に授受関係が関与するものを中心に、「動詞のte形+補助動詞」の主なものを詳しくみていく。

<てやる>77例

「動詞のte形+やる」に使用された動詞を分類すると、主に1)講義内容の説明に直接必要な動詞、2)計算に用いられる動詞、3)一般的な動作に用いられる動詞、4)思考に関する動詞の4種類に分類することができる。講義に使用された動詞を具体的に分類すると以下のようなになる。

説 明：あける、あぶる、つける、ふるい分ける、沈める、入れる、堰を切る  
する（語幹→熟処理、添加、圧入、プロット etc.）、（タービンを）回す  
計 算：かける、かけあわせる、まとめる、引く、解く、割る、求める、足す  
取る、置き換える、置く、変える  
する（微分、積分、変換 etc.）  
一 般：つくる、使う、揃える

思考：考える、思い出す

使用される動詞は、1) 直接講義内容に関する動詞、と 2) 計算に用いられる動詞の 2 種類に偏っている。1) 直接講義内容に関する動詞は、一般の日本語にはあまり用いられないものが多く、各分野ごとに限られた動詞が存在すると思われる。2) 計算に用いられる動詞は、理工系一般の講義で使用される基本的な動詞である。

「-やる」には本来、話者、あるいは話者側の人物が行う動作が、相手に利益を与える時でかつ、その動作を受ける側が目下、動物、または家族である場合に使用されるという原則がある。しかし、講義で使用される「-やる」は、そのほとんどの場合、動作を受ける側がコンクリートや数式の無生物である。つまり、講義で使用される「-やる」の表現には利益や恩恵の授受は関係なく、「-やる」の方向性のみが残っていると考えられる。

<てもらう>27例

「動詞の te 形 + もらう」に使用された動詞は、主に 1) 計算に用いられる動詞、2) 一般的な動作に用いられる動詞、3) 思考に関する動詞に 3 分類できる。講義に使用された動詞を具体的に分類すると以下のようになる。

計算：引く、する（計算、積分、不定積分、足し算）

一般：見る、やる、書き直す、教える

例：中央大学でやってもらえっていうんで、…

（君たちは）～に教えてもらってるから、

思考：考える、信じる

「-もらう」は原則的に、話者が動作を受ける側で、何らかの利益を被る場合に使用される。しかし、講義に使用されている「動詞 te 形 + もらう」は、「計算をしてもらって」「テキストを見てもらいますと」等、聞き手への行為の依頼の配慮として機能しているもので、話し手は何ら利益を受けてはいない。講義に使用された「-もらう」27 例中、2) 一般的な動作に用いられる動詞の、「やる」「教える」の 2 例を除いて、すべて話し手の聞き手への配慮として使用されている。

<ていただく>25例

「動詞 te 形 + ていただく」は、「動詞 te 形 + もらう」より、動作をする側に対して敬意が働いている表現である。この形式が使用された動詞は、1) 思考に関する動詞、2) 一般的な動作に用いられる動詞、3) 計算に用いられる動詞、4) 話し手の行為に言及する使役形をともなった動詞に 4 分類できる。講義に使用された動詞を具体的に分類すると以下のようになる。

思考：覚える、考える、思い出す、思う、分かる、する（理解）



一 般：見る、やる、読む、する（勉強）

計 算：する（証明）

話 者：させる

「動詞 te 形 + いただく」もやはり「動詞 te 形 + もらう」と同様に、聞き手への行為の依頼に対する配慮として働いている。ただし、「動詞 te 形 + もらう」と異なる点は、「動詞 te 形 + もらう」が計算や一般的な動作に関する動詞を主にとるのに対して、「動詞 te 形 + いただく」は思考に関する動詞を主にとる点である。  
<てくれる> 9例

「動詞 te 形 + くれる」は、原則として、動作をするものが主語となり、動作を受けるものが話者、あるいは話者側のものでかつ、何らかの利益を受ける場合に使用される。講義に使用された「動詞 te 形 + くれる」の動詞を分類すると、1) 主語になるものの変化を表す動詞、2) 聞き手の行動に関する動詞、3) 計算に用いられる動詞に分けられる。具体的な分類を以下に示す。

対象の変化：曲がる、入る

聞き手行動：決める、出す、加える

計 算：する（積分、代入）

講義に使われる「動詞 te 形 + くれる」は使用の状況がほとんど固定されている。

・「動詞 te 形 + くれる」 + 条件表現、～困る or 否定表現

例：～たときに、梁が曲がってくれたら困る

～ように、値が入ってくれないと困る

決めてくれないと、答えが～ない。

その他 2 例のみ、聞き手への行動依頼の配慮を示す発話があった。

例：～レポートを出してくれると、点数を上げる

～これを加えてくれませんか。

<てください> 15例

「動詞 te 形 + ください」は、聞き手への行動を依頼する表現である。講義に使用された動詞を分類すると、1) 一般的な動作に用いられる動詞、2) 思考に関する動詞、3) 計算に用いられる動詞、4) 話し手の行動に言及する使役形をともなった動詞に分けられる。以下具体的に分類する。

一 般：やる、送る、聞く、戻る、する（質問、勘弁）

思 考：考える、注意する

計 算：する（積分）

話 者：させる（確認）

「動詞 te 形 + ください」は、聞き手の日常的な行動を依頼するときに用いられる傾向がある。

<てしまう・ちゃう>88例

・ちゃう 64例

「動詞 te 形 + ちゃう」に使用された動詞は、1) 講義内容の説明に直接必要な動詞、2) 一般的な動作に用いられる動詞、3) 計算に用いられる動詞、4) 思考に関する動詞に分類できる。以下に具体的に分類する。

説明：なる、化ける、滑る、吸い込まれる、曲がる、減る、残る、入れる、

量る、変わる、する（液化、通過、拡散、成立、カット）

一般：まとまる、使い慣れる、書く、怒られる、飛ばす、表す

計算：たつ、解ける、消える

思考：感じる、信じる、

「動詞 te 形 + しまう」は大きく分けて、1. 完了、2. 対抗的完全動態、3. 逸走的完全動態、4. 無為指摘動作、5. 不都合・反期待の5つに分類できる（日本語教育学会 1982）。1. は動作・作用の完了を表すもの、2. は積極的に動作に取り組みこれを片づけることを表す、3. はある動作・作用が行われた結果の取り戻しのつかないという気持ちを表す、4. は人間の無意志的な動作を表すもの、5. は不都合なことや期待に反したことが行われることを表すものである。

講義に使用された「動詞 te 形 + ちゃう」をその機能別にみると次のようになる。

・ 5. 不都合・反期待 26例

例：拡散しちゃうって、効果体にならない それは1次性がなくなっちゃう  
決まなくなっちゃうわけです (君たちはすぐ)信じちゃう

5. のうち、自分の行動に関して反省を表すもの 2例

例：あ、マイナスって書いちゃいました

・ 「ちゃう」が意味を持たないもの 26例

・ 話者が能動的に行うもの 4例

例：～はカットしちゃう ここに--入れちゃったら、～が決まります  
全く水分を飛ばしちゃう 使い慣れちゃえば

・ 話者に関係なく起こるもの 22例

これは 100% 通過しちゃう こういう方程式になっちゃった  
g はなくなっちゃうよね

「ちゃう」が意味を持たないものの中には、1. 完了や2. 対抗的完全動態といえるものもあるが、「ちゃう」をはずして用いても発話の意味、ニュアンスに影響が

ないため、意味を持たないものに分類した。

次に「動詞 te 形 + しまう」(24 例)の動詞を分類すると、1) 講義内容の説明に直接必要な動詞、2) 計算に用いられる動詞、3) 一般的な動作に用いられる動詞に分けられる。

説明：～化する、つながる、なくなる、均す、持つ、出る、断ち切る

計算：解く、消える、する(変換、補正、代入)

一般：やる、済ませる、やめる、消す、飛ばす

・ 5. 不都合・反期待 4 例

例：末尾が繋がってしまうことによって、… 硬化してしまって脆くなる  
その中でも自分の行動に関して反省を表す 2 例

消してしまった どこかで飛ばしてしまった

・ 1. 完了 2 例

例：前回、振動をやってしまいましたので。

(今日は)～をやってしまいます

・ 「てしまう」が意味を持たないもの 15 例

・ 話者が能動的に行うもの 8 例

例：これを代入してしまいます 均してしまうことにも、意味がある  
これを断ち切ってしまうというような

・ 話者に関係なく起こるもの 7 例

例：dp は消えてしまうわけで、dx が出せば、～は分かってくる  
瞬間的に変換してしまうデジタルの

「動詞 te 形 + ちゃう」「動詞 te 形 + しまう」の講義における機能をみると、「不都合・反期待」が約 4 割の 34 例、「意味を持たないもの」が約半数の 41 例、「完了」は 2 例のみで、「不都合・反期待」が主な機能だということが分かる。他のものは聞き流しても、講義の内容理解には影響がないので、「不都合・反期待」を聞き取る練習が必要である。

<てまいる> 2 例

「やってまいりました」の形で使用されている。話者側というよりも、クラス全体を総括して述べている。「(私たちは X という内容を)やってまいりましたが」であるが、実際「てまいる」の謙譲の意味は含まれておらず、使う必要性はない。「やってきた」と同じ意味で用いられている。

<ておられる> 1 例

わずか 1 例のみの使用で普通は使われない補助動詞であると思われる。「～先生は(Y という内容を)扱っておられる」として他の先生に対する敬意を表している。

### ③敬語

敬語表現は講義ではほとんど使用されておらず、使用頻度はわずかに 0.78%であった。また、敬語には補助動詞で扱ったものも重複している。使用頻度が 10 以上の主なものだけ、以下に示す。

- ・お + する            例：お配りする      お話しする      お見せする
- ・ + ていただく    例：見ていただく   解いていただく   考えていただく
- ・語彙                例：拝見する    申します    伺う    おっしゃる    参る    頂く

敬意の対象のほとんどは、聞き手である学生であり、本来話し手である講師のほうが立場が上であるにも関わらず講義においては非常に丁寧な敬語を使用している。

### 4. まとめ

以上から、構造工学分野の講義に使用される動詞の特徴として次のことがいえる。

日本語能力試験の出題語彙(国際交流基金 1993)との比較から、講義に使用される動詞は、日本語教育の 1 級レベル(大学入学程度)で取り扱われている語彙と 8 割重複しており、語彙としてはさほど難しいものは使われていないことが分かった。

また、講義の聴解を困難にする要因と考えられる有標表現に関しては、日本語教育の学習項目と講義で必要とされるものとの差が見られた。

まず、中級以上の日本語教育で重要項目とされている使役形、意志・勧誘の表現および敬語は、講義ではほとんど使用されておらず講義の内容理解にはあまり重要ではないことが明らかになった。命令、願望は、直接講義の内容理解につながるものではないが、講義の内容を予測することができるため、確実な把握が望まれる。

講義の内容理解に直接関係する重要な項目は、受け身形、可能形、および動詞に補助動詞のついた形のものである。日本語教育では受け身形の中でもいわゆる「被害の受け身」が留学生にとって困難とされているが、講義では受身形は「～が導かれる」「～と呼ばれる」「～と示される」といった「定義」や「表示」に関わる場合が多く、その使用は限定されている。また、可能形も「求められる」「解ける」「導ける」等、構造工学分野の講義では「計算」「定義・思考」に関わるものに動詞の語彙が限られている。補助動詞についても、使用される種類や性質が限定されていることがいえる。

これらは、構造工学分野の講義聴解を目的とした日本語教育では、使役形などには重点をおかず、「定義」「表示」「計算」に使われる受け身形、可能形などに焦点を絞ったほうが良いことを示唆している。理科系留学生にとって日本語は専門分野の研究を行うための手段であり、日本語学習に対する負担を出来るだけ軽減させるなければならない。ゆえに、講義聴解のために学習すべき語彙や使用法の限定は必要であり、かつ有効であると考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究で明らかになった、動詞の使用頻度の高い有標表現や、補助動詞の機能をもとに、聴解指導へ向けての体系化を進める必要がある。

注1 ( )内は、例文にあげた発話の講義番号と発話番号である。講義番号とは分析資料とした各講義に対して、分析上講義1～6まで付したものである。

### 参考文献(執筆者名五十音順)

- 石田敏子研究室 1992 『講義の日本語における理科系・文科系の特徴 I 1991年度の報告』  
金仁和 「発話末の表現と発話内の用言を中心にした分析」
- 伊藤真里子 1990 「日本人の話しことばの特色についての一考察—大学講義を対象に—」  
『日本語と日本語教育』19
- 金久保紀子他 1993 「講義に日本語における理科系・文科系の特徴」『日本語教育』80
- 鎌田 倫子 1993 「講義に見られる談話要素の階層性と指導の指針」  
『金沢大学留学生センター紀要第2号』 金沢大学留学生教育センター
- 国際交流基金 1993 『日本語能力試験出題基準(外部公開用)  
(「文字・語彙」「文法」「聴解」「読解」)』
- 国立国語研究所 1980 『日本人の知識階層における話しことばの実態』  
文部省科学研究私費特定研究『言語』研究報告書  
1982 『外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)に関する調査研究について』  
1987 『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所報告78 秀英出版
- 東京大学工学部 1989年春期日本語コース講師チーム 1989  
『工学系の専門のための日本語教育』
- 十島真理他 1994 「大学講義における日本語の特徴—語彙の分析を中心として—」  
『平成6年度 日本語教育学会春期大会予稿集』
- 仁科喜久子・武田明子 1991 「理工系大学における外国人留学生の日本語能力に関する  
調査分析—東京工業大学大学院課程を中心に—」『日本語教育』75
- 日本語教育学会 1982 『日本語教育辞典』 大修館書店
- 早川幸子他 1992 「大学講義の分析 留学生の聴解力育成の為の基礎分析」  
『金沢大学留学生センター紀要』 創刊号
- 山崎伸寿・富田豊・平林義彰・羽田野洋子 1992  
『—理工系を学ぶ人のための— 科学技術日本語案内』 創拓社
- 山本一枝 1985 「大学一般教養専門書の読みの難易と文体的特徴  
—日本語中級読解指導との関連において—」『日本語論集』1
- 益岡隆志他 1992 『基礎日本語文法』 くろしお出版

付表1. 有標表現一覧

\*ただし、表内の比率は総用言数  
6455 に対する比率

		例文	格数	総数	比率	その他	否定		446	446	6,909		
ヴォイス受け身	られる		32	104	1.61	補助動詞 敬語 *+する *+頂く *+になる て頂く 致します ゴザイマス マシヤウ ゴ+ ゴ+頂く 敬語句			1280	1280	19.83		
		れる	72		0				51	0.79			
	可能	られる	耐えられる	31	198		3.07			12		0	
		可能動詞	求まる	46			0			3		0	
		助動詞	～ことができる	114			0			1		0	
		得る	あり得る	5			0			10		0	
	使役	きれる	解ききれる	2			0			4		0	
		せる	させる	4	4		0.06			1		0	
							0			4		0	
	ムード	意志	う	29	29		0.45	DOUBLE 受身+授受 仮定+授受 仮定+可能 仮定+受身 可能+授受 意志+授受 使役+授受 敬語+授受 敬語+使役 推量+可能				133	2.06
命令		ましょう	18	18	0.28				39		0		
なさい		命令形	やれ	9		0				64		0	
		比況	助動詞	～ように	62	62	0.96			6		0	
願望		たい	58	58	0.9				9		0		
説明		んです		314		0				3		0	
		わけです		240		0				767	767	11.8	
										3690	3690	56.8	
											86	1.32	
											3604	55.4	
DOUBLEの重なり数													
有標表現総数													

付表2. 補助動詞の種類と活用形別使用頻度

\*表内の比率は総用言数  
6455 に対する比率

	る	ます	た	マシ	マシテ	ない	マシヨリ	命令	たい	たら	ば	て	下	マシ	マシテ	頂	計	比率	
ている	380	138	10	1	0	23	41	0	0	0	1	3	0	0	0	0	597	9.25	
ている	141	73	3	1	0	5	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	227	0	
てる	239	65	7	0	0	18	38	0	0	0	0	1	2	0	0	0	370	0	
である	24	37	2	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	67	1.04
ておく	6	20	3	0	1	5	3	4	1	0	1	0	8	0	0	0	53	0.82	
ておく	3	7	1	0	0	2	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	18	0	
とく	2	11	2	0	0	3	2	3	1	0	0	0	7	0	0	0	31	0	
ておる	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	
とる	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
ていく	7	3	0	0	11	2	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	53	0.82	
ていく	20	6	3	0	0	6	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	40	0	
てく	6	1	0	0	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	13	0	
てくる	104	39	31	1	1	8	10	0	0	0	0	3	0	0	3	1	201	3.11	
てくる	98	39	31	1	1	8	10	0	0	0	0	3	0	0	3	1	195	0	
てく	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	
てしまう	54	8	14	2	0	4	0	0	0	0	0	2	3	0	1	0	88	1.36	
てしまう	12	4	2	1	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	24	0	
っちゃう	42	4	12	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	64	0	
てみる	15	16	1	0	0	2	1	4	2	0	1	2	0	3	0	0	48	0.74	
てみる	14	16	1	0	0	2	1	4	2	0	1	2	0	3	0	0	47	0	
てみせる	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
てほしい	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	0.26	
てください	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	15	0.23	
てくれる	2	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	2	1	0	0	0	9	0.14	
てもらう	13	3	0	0	0	4	0	0	1	0	1	0	4	0	1	0	27	0.42	
ていただく	8	2	1	0	0	1	0	0	0	0	6	0	7	0	0	0	25	0.39	
てやる	41	8	2	0	0	16	2	0	0	1	0	1	5	0	0	1	77	1.19	
てまいる	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.03	
てお礼	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.02	
	691	280	67	5	2	78	62	8	4	1	11	12	25	25	5	1	1280	1280	19.8